「正信偈」について（第十五回）

正信偈の教え中　古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩　戸次公正、等による

得至蓮華蔵世界
とくし　れんげぞう　せかい
蓮華蔵世界に至ることを得れば、

即証真如法性身
そくしょうしんにょほっしょうしん
即ち真如法性の身を証せしむと。

遊煩悩林現神通
ゆうぼんのうりんげんじんづう
煩悩の林に遊びて神通を現じ、

入生死園示応化
にゅうしょうじおんじおうげ
生死の園に入りて応化を示す、といえり。

本師曇鸞梁天子
ほんじどんらんりょうてんし
本師、曇鸞は、梁の天子

常向鸞処菩薩礼
じょうこうらんしょぼさらい
常に鸞のところに向こうて菩薩と礼したてまつる。

三蔵流支授浄教
さんぞうるしじゅじょうきょう
三蔵流支、浄教を授けしかば、

梵焼仙経帰楽邦
ぼんしょうせんぎょうきらくほう
仙経を梵焼して楽邦に帰したまいき。

［意訳］

蓮華蔵世界、すなわち極楽浄土に至ることができれば、ただちに「真実そのもの」という身であることが証明される、と。煩悩の盛んな世界にいながら、自由に不思議なはたらきを現（あらわ）し、迷いの世界に入って人びとを教化するのだ、と教えられた。

わたしたちの祖師、曇鸞大師には、梁の皇帝が、常に曇鸞大師に向かって菩薩に対するように礼拝していた。菩提流支三蔵が、浄土の教え

を授けられたので、曇鸞大師は仙術の経を焼き捨てて、極楽浄土の教えに帰依された。

「蓮華」の様な徳をそなえた、阿弥陀経に説かれる阿弥陀仏の極楽浄土に往生すると、「真実そのもの」に目覚めること、すなわち「仏に成る」ということなのです。従い「信心」によって、私たちは間違いなく浄土に至ることができ、必ず仏に成るのだと教えられるのです。

浄土に往生した人は、浄土にとどまるだけではなく、あたかも密林の様に煩悩がはびこる世界に自由に出入りし、迷いに満ちた園林にあえて入り込んで、そこで苦悩する人びとに応じたはたらきかけうをすることになるというのです。他の人びとを導くことを含めて、それが実は往生した人にとっての往生ということであると教えられているのです。

「私たちの師である曇鸞大師（476-542・北魏）の場合、南の梁の天子・皇帝である武帝（502-549 在位）が、いつも、曇鸞大師がおられる北方に向かって、曇鸞大師を菩薩として敬って拝んでいた」ということです。

当時五十歳を超えておられた曇鸞大師は、広大な仏法をきわめ、また大乗の教えの註釈を完成させるには、健康な心身と長寿を得なければならないと痛感され、やがて大師は十巻からなる仙経、すなわち長生不老の術を説いてある道教の経典を南方で授けられ、喜び勇んで北へ帰られたのです。

途中、洛陽の都に立ち寄られ、三蔵法師の菩提流支（ぼだいるし）にお会いになられた。すると、菩提流支は、唾を吐き捨てて、「何という愚かなことだ」とばかりに、叱りつけたのです。そして、「仏説観無量寿経」を授けて、阿弥陀仏と「無量寿」（長さに関係のない「いのち」のはたらき）について教えた。曇鸞大師は、この教えに触れられて、長生不老などというものは、愚かな欲望に過ぎないことに気づかれ、その長生不老を教える仙経を焼き捨てて楽邦、つまり阿弥陀仏の極楽浄土に往生する教えに帰依されることになられたのです。

「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」

合掌